

# 明治学院バッハ・アカデミー維持会報（第2号）

## 巻頭言 この1年を振り返って

芸術監督 樋口隆一

サントリーホールでバッハの《ミサ曲ロ短調》を歌うという大イベントは、さまざまな危惧をよそに大成功で終わった。

そもそもバッハ没後 250 年にあたる 2000 年に明治学院バッハ・アカデミーを設立した理由のひとつに、白金の丘に建つ明治学院チャペルを中心に、地域に根ざした音楽活動を展開してみたいということがあった。それはかつて若い頃にドイツはシュトゥットガルトの聖母マリア教会の代理合唱長として育んだ体験に基づくもので、クラシック音楽、特にその原点としての宗教音楽が、教会を中心とした地域社会との結びつきを基盤として発展してきたことを、東京でも実現したいというひそかな願いに発していた。

2000 年 4 月から 2010 年 3 月まで 10 年間、59 回の定期公演は大成功のうちに終わったが、2008 年 3 月に行った《マタイ受難曲》の演奏会には、前売りの段階から予想をはるかに超える反響があり、追加公演をせざるをえなかった。小さなチャペルでの大規模な演奏会の開催は、すでに限界に達していたのである。

サントリーホールの開館は 1986 年だが、じつはその前年の 1985 年には、当時は赤坂見附にあったサントリー美術館を会場に、サントリー音楽文化展「バッハ生誕 300 年」が開催されている。ライブツィヒのバッハ・アルヒーフ（当時はドイツ民主共和国国立バッハ研究所）の全面的な協力を得て実現したこの大音楽展は、サントリーホール開館のプレイベントとしての意味も持っていた。当時 39 歳だった私は、この音楽展の日本側監修をさせて頂いたわけだが、その背景には、私のささやかなバッハ研究が、すでに 1972 年のライブツィヒ・バッハ・アルヒーフでの研究滞在から始まっていたことにあるのである。

ご縁というのは不思議なもので、私と明治学院バッハ・アカデミーは、2006 年にはバッハ・アルヒーフが主催するライブツィヒ国際バッハ音楽祭に招待されたし、サントリーホールからは、2011 年と 2012 年の 2 回にわたり、こちらはウィーン楽友協会資料室との共同企画によるオルガンレクチャーコンサート「ウィーン音楽散歩」に出演する機会を頂いていた。

2014 年は私にとって明治学院大学での教員生活の最後の年にあたり、それではサントリーホールで《ミサ曲ロ短調》をやろうということになったのだが、合唱団にとっては初めての自主公演ということもあり、あらゆる意味でハードルは高かった。それがなんとか大成功に終わったのは、まさに一丸となって取り組んだ関係者全員の努力のおかげだが、財政面でサポート役となった「明治学院バッハ・アカデミー維持会」の存在が大きい。

地域との連帯という観点からも、港区文化芸術活動サポート事業助成を頂き、Kiss ポート財団（公益財団法人港区スポーツふれあい文化健康財団）の特別共催を頂くこともできた。明治学院チャペルで始まった音楽活動は、同じ港区に位置するサントリーホールという新しい場を得て、新たな発展を遂げつつあるといっても過言ではない。



ミサ曲口短調 演奏会にて (写真:星ひかる)



ミサ曲口短調 演奏を終えて (写真:星ひかる)

11月28日(土)には、私たちの原点でもある明治学院チャペルでの演奏会もあった。「明治学院チャペルコンサートシリーズ2014」の一環として、木下牧子作曲《光はここに》から3曲と、フォーレの《レクイエム》を長谷川美保さんのオルガン伴奏で歌うことができたのである。フォーレの演奏には、私が2005年から2013年までの9年間常任指揮者を務めていた聖心女子大学グリークラブも共演してくれ、音楽的交流を楽しむことができた。私の後任として常任指揮者を務めて下さっている辻康介さんが、バリトン独唱を歌って下さったことも嬉しかった。《光はここに》の作曲者である木下牧子さんも聴きにきて下さり、「言葉を大切にしているのが嬉しい」というありがたいお言葉を下さった。バッハにしても日本の合唱曲にしても、これは私が一番大事にしていることなので、なによりのお褒めの言葉である。

12月23日(火)には、恒例のクリスマス音楽礼拝に参加した。ヘンデルの《メサイア》から「ハレルヤ」でしめくくるのはいつものことだが、今回はバッハの《ミサ曲口短調》の最終曲「ドナ・ノビス・パチェム」(われらに平和を与えたまえ)を、クリスマスの祈りの一環として歌えたのも感慨深かった。

年が明けて、3月14日(土)には宮城県白石にある白石ホワイトキューブで、白石キューブ合唱団とのジョイントコンサートを行った。詳しくは原田慎太郎さんの報告に譲るが、N響団友オーケストラの協力を得てのこのジョイントコンサートも3回目を迎え、まさに軌道に乗った感がある。今回はブルックナーのモテット、ハイドンの小オルガンミサ曲のほか、オーケストラのみの演奏でいわゆる「アルビノーニのアダージョ」と、モーツァルトの《3つのディヴェルティメント》K.136-138も指揮することが

できた。この素晴らしいオーケストラとの共演は、同楽団副委員長の蓬田清重さんとの友情によって実現した。蓬田さんは、私が会長をしている DAAD 友の会の副会長でもあり、ともに日本とドイツの学術文化交流に尽力している間柄なのである。今回は、N 響現役団員の齋藤麻衣子さんがコンサートミストレスを務めて下さったが、彼女もまた私たち同様にドイツ学術交流会 (DAAD) の奨学生としてドイツのフライブルク音楽大学に学んだ俊英であり、オルガン、合唱、オーケストラによる教会音楽というきわめてドイツ的な音楽会の意義を理解しておられる音楽家でもある。今回、私が個人的に嬉しかったのは、元 N 響団員の茂木新緑さんがチェロを弾いて下さったことである。茂木さんは麻布高校の 2 年後輩で、ともに広田幸夫先生のもとでチェロを学び、音楽部で合奏を楽しんだ仲だったからである。ほぼ半世紀前の「楽興の時」を思い出しながら、私はタクトを振っていた。

さて、2015 年度は、明治学院バッハ・アカデミーの自主的な活動の 2 年目となる。2016 年 3 月 20 日にサントリーホールで予定している《マタイ受難曲》は編成も大きく、財政的にもより大きな困難が予想される。だからこそ関係者がさらに一丸となって取り組み、良い結果をもたらすことを期待している。



## 遠征日記ー白石ホワイトキューブから

テノール 原田慎太郎

2015 年 3 月 14 日、バッハ・アカデミー合唱団は宮城県白石市にあるホワイトキューブ (白石市文化体育活動センター) を訪れた。地元で活動する白石キューブ合唱団とのジョイントコンサートのため、白金から白石へと場所を移し歌いに来た。白石は、仙台と福島の間位置し、白石蔵王駅までは東北新幹線で都心から 2 時間もかからず行くことができる。

なぜ、“白石”という地で 2 つの合唱団の交流が始まったかという、そのきっかけは、“東日本大震災”であった。以前バッハアカデミーと一緒に歌っていたメンバーが、仕事で白石に赴任となり、地元でも合唱を続けるというキューブ合唱団に入っていたが、同地で大震災を経験した。合唱団の本拠地であったホワイトキューブも被害にあい、合唱を続けるのすら絶望的な状況であると連絡が入った。街の復興が続く中、ホワイトキューブのホールの修繕に目処が着いた頃、音楽を通して何か一緒にできないかと企画されたのが「明治学院バッハ・アカデミー合唱団 / 白石キューブ合唱団ジョイントコンサート」であった。今では年に一度の恒例行事にもなり、今回で 3 度目の共演となる。

ホワイトキューブのコンサートホールは、一般的なコンサートホールと異なり、ガラス張りの壁面で残響がとても長く、国内最長級の残響時間 (3.9 秒 / 500Hz) を誇る。室内楽や合唱に適したホールであり、バッハ・アカデミーでもこれまで響きを重視した宗教音楽を歌ってきた。ホールの各所に設計者のこだわりがみられるが、最も目を魅くのがパイプオルガンであろう。銅製パイプや 5 段鍵盤、無数にあるストップなど、この空間でどのような音を響かせてくれるのか、見るたびに楽しみになる楽器である。ちなみに、キューブ合唱団は毎週、このホールで練習しているというから驚きである。大変うらやましい。

バッハアカデミーにとって、このジョイントコンサートは美しい響きを持ったホールで演奏できるというだけではなく、N響団友オーケストラとも共演できる素晴らしい機会が与えられた場でもある。N響団友オーケストラは、NHK交響楽団のOB・OGを中心に構成されており、第1回から共演してきた。毎回、とても洗練された美しい響きに聴き入ってしまう。今年は、現役N響メンバーの齋藤麻衣子さん(ヴァイオリン)も一緒に演奏して下さった。

第3回を迎えた今回は、オルガン独奏、弦楽合奏、オルガンと弦楽、アカペラ、合唱(ピアノ伴奏)、ミサ曲とバリエーションに富んだプログラムとなった。これらを一度の演奏会で聴くことができるホールはここだけではないだろうか。

バッハ・アカデミー単独では、アントン・ブルックナーの無伴奏のモテット《Locus iste》、《Christus factus est》、《Virga Jesse floruit》、《Os justi》を歌った。本番、ホールで歌ったとき、ヨーロッパの教会の響きとまではいかないものの、フレーズの歌い終わりが全て反響して聞こえてきたことに感動を覚えた。ブルックナーがこれらを教会で歌うために作曲したということも歌いながら理解できた。日本のコンサートホールではなかなか出来ない体験だろう。

ハイドンの小オルガン・ミサは、オルガニスト、オーケストラ、ソリスト、両合唱団が本番前のリハーサルではじめて全体で合わせたが、限られた時間の中で、器楽と合唱のバランス、タイミングなどを探りながら、しだいに良くなっていくのが分かった。合唱団についていえば、第1回よりも第2回よりも、今回の方がずっと声が交わるのが早かったし、ホールも一層響いていたようだった。3年間続けてきた成果かもしれない。本番も歌い終わって大きな拍手をいただき、「よかったですね！」とお互いに言い合って終ることができた。



ホワイトキューブ リハーサルの様子



ホールのロビーにて打ち上げ

今回で3回目のジョイントコンサートになったが、お互いの合唱団そしてN響団友オーケストラが年に一度のこの演奏会を楽しみにしている。地方でクラシカルなプログラムを行なうことが容易ではない今、白石での繋がりはとても大切なものとなっている。かたや、バッハアカデミーの団員は、演奏



会后一泊して、市街地の観光や地元の温泉に行ったりスキーをしたり、在来線で仙台まで出て旬の物を食べたりと各々楽しんでいるようだが、それも遠征の醍醐味である。

すでに第4回のコンサートが2015年11月14日に決まった。次は、蔵王の山々が紅葉で色づいている季節の演奏会になりそうだ。

#### プログラム

明治学院バッハ・アカデミー合唱団／白石キューブ合唱団 ジョイントコンサート(第3回)

会場:ホワイトキューブ

指揮:樋口 隆一、佐々木隆行(※)

独唱:光野 孝子(ソプラノ)

合奏:N響団友オーケストラ

オルガン:吉村昌美

合唱:白石キューブ合唱団／明治学院バッハ・アカデミー合唱団

《曲目》

ヤン・ツヴァールト:「トッカータ 詩編 146」

レモ・ジャズット:「アルビノーニのアダージョ」

ブルックナー:「4つのモテット」

小林秀雄:「落葉松」(※)

モーツァルト:3つのディヴェルメント

J・ハイドン:神の聖ヨハネのミサ・プレヴィイス(小オルガン・ミサ) Hob.XXII:7



## 教会音楽のしらべ

バス 大谷浩史

明治学院バッハ・アカデミーは、白石の他にもいくつか国内の演奏旅行に出かけている。今回は2012年に行った九州での演奏会をご紹介します。

この時は、明治学院大学出身で西南学院大学の音楽主事を務める安積先生との共同企画で、2012年4月14日(土)に明治学院大学白金チャペルで、翌週の21日(土)に博多の西南学院大学チャペルで、「教会音楽のしらべ」と題して同じプログラムでの演奏会を行った。安積先生は、明治学院大学文学部を卒業後ドイツに留学され、ドイツ国家資格A級教会音楽家(カントール)を取得して、2008年に帰国された時には明治学院バッハ・アカデミーの副指揮もされていた。その後2009年4月より西南学院大学の音楽主事として活躍中である。西南学院大学は、1916年に創立された歴史ある学校で、キリスト教教育を基礎とした国際色豊かな大学である。

安積先生は留学時には樋口先生にも相談されたということで、私達も帰国後しばらく指導していただいたご縁で、この時の演奏会が実現した。演奏会オープニングのトークでも、樋口先生から、面白いエピソードも交えてこのあたりの経緯が紹介されていた。

プログラムは、2011年のサントリーホールでの演奏会(ウィーン音楽散歩Ⅰ)でも歌ったシューベルトやブラームスに加え、バッハとブルックナーのモテット、ハイドンのミサ全曲などを演奏した。

ブルックナーは交響曲でも有名であるが、もともとオルガニスト兼学校の校長先生であった父から手ほどきを受け、オーストリア中部の都市リンツの聖フローリアン修道院附属教会のオルガニストとして奉職していた。声楽曲もミサ曲や《テ・デウム》のような壮大な作品が目立つが、今回演奏したような小品も教会音楽家としてのブルックナーの作品において重要な部分を占めていた。聖フローリアン教会、リンツ大聖堂のオルガニスト時代からウィーン大学で講師として活躍した晩年まで、モテットは交響曲の作曲を本格的に始めた時期を除いて生涯を通じほぼコンスタントに作曲されている。

今回の3曲は45~55歳くらいに書かれたもので、5分程度の短い時間の中に、pppからfffまでの広いダイナミックレンジ、遠隔調への転調、歌詞の内容に応じた表現の変化などが求められ、ブルックナーのエッセンスが凝縮したものとなっている。楽譜の見かけや聞いた感じよりは相当に難しい、大変な曲である。

バッハのモテットは、これまでバッハ・アカデミーで演奏していなかった《恐れることなかれ、われ汝とともにあり》BWV228に取り組んだ。前半は8声による二重合唱で「恐れるな」と力強く始まり、歌い交わしによって盛り上げた後、後半は4声となってソプラノの歌うパウル・ゲルハルトのコラール「われなにゆえに悲しまん」を下3声が対位的に支える。後半は音楽的には淡々と進行し、コラールをじっくりかみしめる構成になっている。初演の手がかりは全くないが他のモテット同様葬儀のための音楽であったと想定されている。

さらに、オルガンと合唱だけでなく、安積先生のオルガンソロもお楽しみいただいた。ヨーロッパの教会にはオルガンが普通に据え付けてあり、聖歌隊と一緒に日常的に音楽活動が行われ、バッハやブルックナーの作品も生活の一部に溶け込んで鳴り響いている。もともとバッハ・アカデミーもそのような地に足のついた取り組みとして始められ、これまで続いてきているので、いわば原点に返った演奏会ともいえよう。

明治学院チャペルでの演奏会は、雨の中、また急に寒くなったにもかかわらず、ほぼ満員のお客様に聞いていただくことができた。単純なように見えて響きを高く保つのは意外と難しいハイドンや、ゆったりとしたテンポの中に微妙な呼吸や間があるブルックナーなど、スリリングではあったが実演の良い緊張感で集中して演奏できたと思う。

その一週間後、現地集合ということで参加者はそれぞれ博多に向かった。夫婦で参加した私と妻はお昼に到着して二人で博多ラーメンを味わい、その後合流して西南学院のチャペルでリハーサルである。

西南学院のオルガンは、日本のオルガン製作の草分けである辻オルガン工房の作品で、33のストップと3段の手鍵盤+ペダルを備えている。明治学院白金チャペルの楽器と同様に、パイプの材料から厳選して手作業で組んでいくこだわりの作りから出てくる音は、声とよく融け合う柔らかな響きであった。

西南学院での演奏会は、14日よりさらにうまくいった。白金同様響きの良い会場に助けられ、そのままの勢いでバッハまで歌いきることができた。終演後は、もちろん博多の街に繰り出して安積先

生にいろいろのご案内いただき、夜遅くまで皆で楽しんだ。歴史好きの私としては、西南学院の構内に復元移築されている元寇防塁や、その後に訪れた大宰府政庁跡や水郷柳川のお堀巡りも興味の尽きない思い出である。

西南学院大学チャペルは、チャペルというよりはほとんどコンサートホールで、教会にありがちな外の騒音が入ってくるということも無い。この恵まれた環境を活用して、これからも地域に根付いた活動が続けて行かれるとのことで、私達との演奏会の後は自前の合唱団を特訓して、マタイなどの大曲にも挑戦されている。またご指導いただくこと、あるいは合唱団との協演もできることを楽しみにしながら稿を終えたい。



西南学院大学チャペル



チャペル内

#### プログラム

「教会音楽のしらべ」

指揮：樋口隆一

オルガン：安積道也

独唱：光野 孝子(ソプラノ)

明治学院バッハ・アカデミー合唱団

#### 《曲目》

J.ハイドン ミサ曲第5番変ロ長調「神の聖ヨハネのミサ・ブレヴィス」Hob.XXII-7

J.ブラームス 「アヴェ・マリア」Op12

A.ブルックナー 「この場所は神によって造られた」WAB23、「舌よ、歌え」WAB33、交唱「マリアよ、あなたはまことに美しい」WAB46

F.シューベルト 「証をするのは三者」イ短調 D181

J.S.バッハ モテット「恐るることなかれ、われ汝とともにあり」BWV228、プレリュードとフーガ ト長調 BWV541

G. ベーム 「ただ愛する神の摂理にまかす者」 他



## 樋口先生 テオドル・ベルヒェム賞受賞！

2015年2月21日(土)、樋口先生の最終講義の場にて、嬉しいサプライズがありました。挨拶に見えていたDAAD(Der Deutsche Akademische Austauschdienst:ドイツ学術交流会)東京事務所のウルズラ・トイカ氏より、樋口先生に対してテオドル・ベルヒェム賞が贈られるという発表がありました。この賞は国際的な文化交流ならびに大学間の学術交流における優れた業績を残した人に授与されるもので、長くDAADの会長を務めたテオドル・ベルヒェム氏の名前を冠し、2011年に創設されたもの。賞は4年に1回ということで、樋口先生は2人目となります。新バッハ全集校訂や指揮活動などの業績はもちろん、特に音楽分野での日独学術交流が高く評価されたということで、バッハ・アカデミー団員も大変誇らしい思いで一杯です。樋口先生、おめでとうございます！

詳細はこちらのサイトで。(表記が違うだけで同じところに飛びます)

<http://tokyo.daad.de/wp/2015/03/%E3%83%86%E3%82%AA%E3%83%89%E3%83%AB%E3%83%BB%E3%83%99%E3%83%AB%E3%83%92%E3%82%A7%E3%83%A0%E8%B3%9E/>  
または <http://tokyo.daad.de/wp/2015/03/テオドル・ベルヒェム賞/>



## バッハ・アカデミー維持会 第二期募集中！

2014年度は、ご支援いただき大変ありがとうございました。おかげさまで活動も滞りなく進められ、こうして皆様に一年間のご報告をすることができました。合唱団一同、樋口先生のご指導の下、さらなる発展を目指してこれからも練習に励みたいと思います。ぜひ、引き続いてのご支援をよろしく願いいたします。

次回演奏会のお知らせ

日時・会場：2016年3月20日(日) 17:30 開演 サントリーホール 大ホールにて

曲目：J.S. バッハ 「マタイ受難曲」 BWV244

指揮：樋口隆一

維持会員の方には、招待券を1枚お送りいたします。また、本公演のチケットを維持会員特別価格にてご購入いただけます。

ホームページ：<http://www1.m.jcnnet.jp/bachakademie/>

明治学院バッハ・アカデミー維持会報 第2号 2015年3月31日発行